特別企画展「泰西王侯騎馬図屏風と松浦屏風」展によせて ――

狩野派と〈初期洋風画〉

16世紀半ばから江戸時代初期のキリシタン弾圧までの、半世紀あまりの間だけですが、入信したキリシタンが、宣教師の指導をうけて西洋風の絵画を描いていた時期がありました。その絵画を〈初期洋風画〉と呼びます。

初期洋風画は、イエスやマリアを描く礼拝用の聖画だけでなく、西洋の王侯の肖像や、婦人像、田園の遊楽や狩猟図、そして戦争画など、世俗的な主題の屏風も制作されて大名などへの贈り物に使われました。その初期洋風画の記念碑的作品が、本展の主役の、会津若松藩松平家伝来「泰西王侯騎馬図屏風」(もと8曲1双)です。現在は、サントリー美術館と神戸市立博物館に分蔵されていますが、本展ではサントリー美術館からお借りしました。

描かれているのは、鎧をつけて駿馬に乗る4人の王侯。「武装した騎士」の絵が日本人に歓ばれることは、宣教師たちの間に知られており、まさにそれに合致する主題です(1)。しかも、近年の研究では、スペインのフェリペ2世が1580年に中国(明)皇帝への贈り物として用意した絵画五点のうち、三点が甲冑姿のスペイン王侯の肖像で、そのうちの二点が、この屏風に描かれているような等身大の騎馬図であったことも指摘されています(2)。すなわち、王侯騎馬図という主題は、そもそも、東アジアの未開の異教徒にキリスト教と文明の恩沢を施して支配下におこうとする、スペイン国王の野心を含意するものでもあったようです。

この屏風の制作時期は、残念ながら不明です(3)。従来、この絵の原図と考えられてきた銅版画が刊行された1609年が、この屏風絵の制作時期の上限とされてきました。しかし、銅版画に先立つ絵画があったはずですし、先に触れたように、明帝へ贈呈予定であった「等身大騎馬図」の存在や、1583年には画家でもあった修道士ジョバンニ・ニコラオが絵画教育担当として来日していることなども考えあわせ、それよりも遡る可能性も説かれています。

それにしても、たいへんよく描けています。絵具を塗り重ねたマットな質感も西洋絵画風です。ふわふわと重なる金髪の巻き毛、豪奢な織物で作られた衣装、王冠にはめ込まれた色とりどりの宝石などに目を奪われます。馬が妙に人間臭い顔付きをしているのが玉に疵ですが、陰影法や短縮法を使いこなし、全体としてはみごとな仕上がりです。

かつて武田恒夫氏は、この絵を描いたのは、確かな腕をもつ狩野派絵師だろうと推測されていました。そして、キリシタンと狩野派絵師との接触にも目を向けるべきだと提言されていました(4)。

狩野派が、キリスト教関連の物や、西洋の人物、動物を画中のモチーフとすることは珍しくありません。本展で展示する狩野派の「南蛮屏風」(サントリー美術館蔵)には、そうしたエキゾチックなモチーフが満載です。しかし、ここで問題となるのは、はたして狩野派は、陰影法や遠近法といった初期洋風画にみられる表現方法を取り入れようとはしなかったのか、という点にあります。

狩野派による洋風表現の試みの痕跡をとどめる作品として、大阪城天守閣所蔵の「南蛮屏風」〔図1〕を挙げることができます(5)。異国人が肩にかけたストールに陰影法が駆使されていること〔図2〕は、早くから指摘されてきましたが、それに加え、その顔に眼窩にそって灰色の影がぼかして入れられていることや、あえて、描きにくい角度から顔をとらえ、短縮法を使うことにも注目したいと思います〔図3、4〕。眼窩の影は、当館所蔵の初期洋風画「婦女弾琴図」〔図5〕とも共通します。

この屏風は、慶長期を活動時期としていた、正統的な狩野派絵師の作ですが、その名前を特定できません。1600年前後に、孝信、内膳、山楽など、狩野派の有力絵師が数パターンの南蛮屏風を制作し、その図様構成が後続の狩野派絵師に活用されました。たとえば、大阪城天守閣本の図様構成も、本展の前期に展示する「南蛮屏風」(サントリー美術館蔵)をはじめ、いくつかの屏風に共有されています。しかし、こうした洋風表現は受け継がれません。

むろん、狩野派は初期洋風画の陰影や短縮法も含む遠近表現の玄妙な効果を知ってはいたのでしょう。ただ、それを結果的には受け入れなかったようです。狩野派の矜持が、洋風表現の狩野派様式のなかへの、越境と侵入を許さなかったとみるべきなのか、それともキリシタン様式としてあえて距離をおいたのか、そのあたりの事情は解明できていません。

したがって、〈泰西王侯騎馬図〉が狩野派作品である可能性も、まったく見通せないのです。　　(泉　万里)

(1)坂本満『日本の美術』80号　初期洋風画　至文堂　1973年
(2)岡田裕成「ハプスブルク・スペインの東アジア外交と美術の地政学」『美術フォーラム21』43号 2021年
(3)石田佳也「南蛮美術の光と影《泰西王侯騎馬図屏風》の謎に迫る」サントリー美術館・神戸市立博物館・日本経済新聞社編『南蛮美術の光と影』2011年
(4)武田恒夫『狩野派絵画史』吉川弘文館　1995年
(5)泉万里「外への視線　――標の山・南蛮人・唐物」玉蟲敏子編『講座日本美術史』5〈かざり〉と〈つくり〉の領分　東京大学出版会　2005年
図版出典　坂本満他編『南蛮屏風集成』中央公論美術出版　2008年

図1

図2

図3

図4

図5

季刊 美のたより No.218
令和4年4月1日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.